

研究展望

舞踊人類学と舞踊民族誌

井上 淳生*

[舞踊人類学、舞踊民族誌、舞踊研究、民族誌的転回、参加志向性]

I はじめに

II 舞踊人類学／dance anthropology

1 dance anthropologyの展開

2 舞踊と社会規範とのせめぎ合いに関する研究

3 フィールドの再設定

III 舞踊民族誌／dance ethnography

1 舞踊研究における民族誌的転回

2 実体験に基づく再帰的思考の重視

IV 日本における舞踊人類学

1 日本における舞踊人類学の先駆者

2 民族音楽学と舞踊人類学

V 舞踊人類学の展望

I はじめに

日本の文化人類学者の間で、これまで「舞踊人類学」の名を耳にすることは多くなかった。「舞踊人類学」に対応するdance anthropology（またはanthropology of dance）¹⁾が英米圏で登場したのは1960年代から1970年代にかけてのことである[遠藤 1999: 326]が、これまで日本文化人類学会発行の『文化人類学』（旧『民族学研究』）において舞踊を中心に扱った論文のなかに「舞踊人類学」に言及したものは管見の限り見当たらない²⁾。舞踊に関する、特に英米の人類学において行われてきた研究の蓄積を参照し、現在の動向に目を向けることは、舞踊を対象とした日本の人類学の今後の展開に少なからぬ貢献があるはずである。

本稿ではこれまでの日本語による舞踊人類学／dance anthropologyのレビュー[遠藤 1999, 2000, 2001; 宮尾 2003]の内容を踏まえつつ³⁾、それに英米の人類学者によって行われてきたもの[Grau 1993; Kaeppler 1978, 2000; Lange 1980; Reed 1998]を補足し、近年の動向について検討することを目的とする。

その際に、舞踊人類学のなかから登場し、近年の舞踊研究⁴⁾において注目されつつある舞踊民族誌について言及する。

II 舞踊人類学／dance anthropology

1 dance anthropologyの展開

舞踊人類学とは、舞踊そのものを考察の対象とした人類学的研究であり、世界各地に見られる舞踊と呼ばれる現象の、人間の生活における位置付けを探ろうとする舞踊研究の一分野である。後述するように、特にアメリカの民族学者、ガートルー・クラース[Kurath 1960]の視点を引き継いだ人類学的舞踊研究を指す。

舞踊人類学のレビューを行った遠藤保子は、西欧の舞踊人類学の展開過程を、①草創期（19世紀末から第2次世界大戦後）、②確立期（第2次世界大戦後から1970年代頃）、③展開期（1970年代頃から現在まで）に区分している[遠藤 1999, 2000]。補足を加えつつ表現し直すならば、舞踊人類学の①草創期は、西欧にとっての「未開社会」における舞踊を人類学の先人達が研究した時期であり、②確立期は、文化相対主義的思潮のもとに、舞踊を考察の中心に据えた人類学の構想、体系化が進められた時期である。③展開期は、1980年代のポストモダニズムを経由して、「土地や民族の枠組みを超えて展開する舞踊」という視角が登場し、フィールドワークにおける調査者自身の「主観」に積極的な意味付けが行われた時期である⁵⁾。以下では、各期に沿って舞踊人類学の輪郭を記述する。

①草創期では、たとえば、エドワード・タイラーは「舞踊を踊ることは、我々文明人の目から見れば取るに足らない遊びに見えるのだが、文明の幼少期においては、舞踊は情熱を傾けるべき極めて重い意味を持ったものである」[Tylor 1881: 296]と表現した。この主張はその後の社会進化論の立場に分類される人類学者に引き継がれ、「文明化とともに未開社会の舞踊は消滅していく」という主張⁶⁾の基礎になったと指摘されている[Royce 1977: 215; Williams 2004: 65-66]。

人類学的関心から行われたその後の舞踊研究は、構造機能主義的アプローチからのものが主流であったと指摘されており[Quigley 1997: 106]、対象となる社会の調和および秩序を維持する際に舞踊がいかなる機能を果たすのか、という点に注目が集まっていた[e.g. Mead 1928 (1976); Radcliffe-Brown 1922]。なかでも、エヴァンズ＝プリチャードは、1928年の論文「舞踊」のなかで、舞踊が担う社会的機能を高く評

*北海道大学 email: info@ainoue.net

価し、舞踊という対象が民族学のなかで持つ理論的な奥行きに注意をうながしていた [Evans-Pritchard 1928]⁷⁾。

しかし、舞踊人類学者のアンヤ・ロイスによれば、当時のアメリカにおいては、舞踊はいくつもの民族誌に登場しこそすれ、記述に彩りを添える「補足情報 (side note)」として扱われる傾向にあった [Royce 2002 : xviii]。その一方で、舞踊はヨーロッパを拠点とする民俗学者や歴史学者によって研究されてきたことが指摘されている [O'Shea 2010 : 4 ; Royce 2002 : xviii]。

②確立期を特徴付ける最も重要な人物にガートルード・クラスがいる。舞踊人類学の始まりについて語られるとき、クラス [Kurath 1960] はその開祖的存在として位置付けられてきた [Kaeppler 1978 : 35, 2000 : 118 ; Reed 1998 : 506-527 ; 遠藤 1999 : 328 ; 宮尾 2003 : 5]。

クラスが活躍した頃のアメリカは、文化相対主義的舞踊観をもとにそれまでの自文化中心主義的舞踊観への批判が行われていた時期である。自文化中心主義的舞踊観とは、西欧の舞踊 (主に劇場で行われるバレエ) を頂点とした社会進化論に基づく舞踊観を意味する。クラスは、個別の舞踊の収集・記録に終始しがちであったそれまでの「民族舞踊学 (dance ethnology)」を人類学として扱う必要性を打ち出した。つまり、彼女にとっての「民族舞踊学」とは、西欧以外に見られる舞踊を収集・記録することが目的とされており、その行為そのものが「西欧/非西欧」の差異を強調し、結果として両者の間の序列を強化する役割を果たしていた。それに対し、「舞踊人類学」とは「西欧/非西欧」の区別なく、人間の生活において舞踊と呼ばれるものの位置付けを探ろうとするものであった [Kurath 1960 : 250]。

クラスの影響を強く受けたジョアン・ケアリノーモクは、「一人の人類学者はバレエをエスニックな舞踊のひとつとして見る」という論文のなかで、舞踊概念に潜む西欧中心主義への批判を行った [Kealiinohomoku 1983]⁸⁾。その影響を受け、それ以前人類学的舞踊研究では西欧の舞踊とは異質な「未開」社会における舞踊への注目が一般的だったのに対し、西欧社会内部にある舞踊へも関心が集まるようになった⁹⁾。

③展開期となる1980年代以降、西欧の人類学者の目から見て異文化のなかに「舞踊と呼びうるもの」を「発見」し、西欧の舞踊 (主にバレエ) との比較においてその前近代性を説く研究姿勢 [e.g. Clarke and Crisp 1982 ; Sachs 1963 (1972) ; Steinman 1995] が批判された結果、西欧のdanceに一致するところの「普遍的

な舞踊」の定義が困難になるようになった。このような自文化中心主義的舞踊観への批判は、舞踊そのものをとらえる視座にも影響を及ぼし始める。というのも、舞踊人類学者のピーター・ブリンソンが指摘するように、舞踊は超歴史的に存在する本質的なものではなく、固有の状況のもとに、当事者および調査者のなかに暫定的にその実在が確認されるものである、という立場に舞踊を扱う人類学者の視点がシフトしたからである [Brinson 1985 : 212]。

2 舞踊と社会規範とのせめぎ合いに関する研究

「舞踊と呼びうる現象はどのような過程で生成するのか?」という問いかけが現実の舞踊をとらえる視座として採用され、個別の状況に応じて「舞踊」に対する意味付けが行われてきたなかにおいて、その根底で現在まで維持され続けてきたひとつの前提があるように思われる。それは、「日常」の世界から「非日常」の世界に眼差しを向ける、というものである。言い換えると、舞踊が取り上げられるテーマや文脈に応じて、「日常」の位置に「(近代) 西欧」や「自文化」、「非日常」の位置には「非西欧」や「異文化」などがそれぞれ配置され、社会人類学者のポール・スペンサーが指摘するように、舞踊は「日常」に属する何らかの秩序から逸脱する文化的営為として対象化されてきたのである [Spencer 1985 : 28]。その意味で、舞踊とは日常の秩序に揺さぶりをかけるものであり、「潜在的な変革の可能性を有するもの」 [Hanna 2006 : 30] なのである。この基本姿勢のもとに、「非日常」に属する舞踊は、コミュニタスを導く文化的装置、統治権力に対する連帯の手段、国民的紐帯のシンボル、グローバル化のなかでの「自己異国風化 (auto-exoticization)」 [Savigliano 1995 : 137] の手段、さらには、宗教的禁忌に挑むものとして、「日常」の秩序に対する抵抗の一形態として分析され、意味付けがされてきた。以下では、そのなかでも主要なテーマである規制との関係に焦点を当てた研究に触れておきたい。

舞踊と規制について考えるとき、思い浮かぶ疑問は、なぜ舞踊が規制 (もしくは禁止) されるのか、というものである。舞踊を対象とした人類学においてこのテーマに取り組んだ先行研究を概観すると、この理由として大きく2つの立場があることに気づく。それは、舞踊が「統治権力に対する反乱が企図される場所」とされてきたことを指摘する立場 [Hazard-Gordon 1990 : 32-34] と、不道徳 (特に性的な意味での) の温床とされてきたことを指摘する立場 [Wagner 1997 : 395] である。いずれも、「秩序に対する脅威」という意味付けを舞踊に対して行っている点で共通し

ており、舞踊の規制（禁止）が秩序の維持につながるということが示唆されている。

前者では、舞踊を被植民者による連帯の手段として、あるいは統治者に対する民衆蜂起の起爆剤として、国民国家内のマイノリティが自らを本質化する手段として、統治権力にとっての脅威等として位置付けており、時には法律による制度的規制の対象として描いている。

たとえば、ハイチにおけるブードゥー教の舞踊に注目したケイト・ラムゼイは、国家がいかに儀礼における舞踊を恐れたのか、逆に、民衆がいかに舞踊を心の拠り所としたのかについて論じている [Ramsey 1997]。一方で、キューバ国家がルンバを公式の舞踊に認定し、それによって国民間の紐帯を強化しようとする過程を分析したDaniel [1991] 等の研究もある¹⁰⁾。

近年では、職業者としてのダンサーの人権や、国民国家における文化政策のもとでの舞踊の伝承者の権利等、これまで注目されてこなかった人権の観点から舞踊をとらえたJackson (ed.) [2004] や、Jackson and Shapiro-Phim (eds.) [2008] 等の研究も登場している。

後者の、舞踊を性的不道徳の温床と見る立場では、セクシュアリティをめぐる社会的規範との関係から舞踊が位置付けられている。たとえば、アン・ワグナーは、17世紀から現在にかけての、アメリカにおける舞踊に対する否定的な見解に関する歴史的な調査を行っている [Wagner 1997]。彼女によれば、キリスト教圏における舞踊に対する反対意見のほとんどが、白人のプロテスタントの男性聖職者や福音派の信徒によって広められ、これらの大部分は女性、すなわち、女性の身体や衝動に対する恐れに由来するとされている。さらには、キリスト教圏において何世紀にもわたって広く言い伝えられてきた舞踊に対する反発は、舞踊をすることやその周囲の環境が導く性的な不道徳性に起因していると述べ、舞踊は精神も霊魂もどちらの教化にもつながらず、単なる身体の運動にすぎない、という評価が下されていたことを指摘している [Wagner 1997 : 395]¹¹⁾。

3 フィールドの再設定

舞踊を「日常の秩序に揺さぶりをかけるもの」という視点から眺めてきたこれまでの研究の流れに加えて、現在では、対象化すべき舞踊の所在が以前にも増して不確かになっている状況も見られる。グローバル化した現代において、文化としての舞踊に対する、越境・加工・消費といった際限のない生成のプロセスが駆動され、その渦中に調査者自身も巻き込まれるために、眼前に展開される舞踊の実践に対して、従来のように、特定の地域や民族にのみその帰属を求めることが不可

能になっているのである。

このような現実とは、調査における調査者／被調査者像の変容をもうながす。つまり、調査者とは別の時空間に存在する「遠くの他者」を対象としてきた伝統的な人類学的調査の範型が相対化され、調査者と同時代かつ「複数の場所にいる他者」 [Daniel 2005 ; Prickett 2013 ; Wulf 1998, 2007] や「身近な他者」 [Nahachewsky 1999] という他者像¹²⁾が、調査対象を表す概念として登場したのである。たとえば、国際的なバレエの変容を対象とする舞踊人類学者のヘレナ・ウルフは、調査のために複数の地域を何度も往来する様子を玩具の「ヨーヨー」の動きにたとえてYo-Yo Fieldworkと呼んでいる。彼女の主な調査地は、ストックホルム、ロンドン、ニューヨーク、フランクフルトの4か所であり、現代は以前にも増して複数のフィールドで調査を行う必要に迫られていることを指摘している [Wulf 2007 : 139-145]。

ここで重要なのが、調査対象となる「他者」のなかに調査者自身も含まれているということである。舞踊に関して言うならば、舞踊人類学者のジョナサン・スキナーが指摘するように、調査における身体の間接性の高さから、調査対象としての自己の経験が極めて重要な「資源」として扱われるのである [Skinner 2010 : 111]。

一方で、舞踊を特定の地域や民族にのみ結びつけてとらえることができなくなった現実に対する試みのひとつとして、アメリカの舞踊史学者ジュリー・マルニグの研究を挙げることができる [Malnig (ed.) 2009]。マルニグは、空間的、時間的、民族的な座標軸の上にその帰属を固定できなくなった舞踊を、ソーシャルダンス (social dance) とポピュラーダンス (popular dance) という概念によってとらえようとしている。マルニグによれば、ソーシャルダンスは、共通の関心によって集まった「既にある」集団において行われる舞踊ではなく、舞踊の「結果」、出来上がった集団、場、実践のことを指す。一方、ポピュラーダンスは、個別の実践としての舞踊がローカルなコンテクストから離床したものを指す [Malnig 2009 : 4]。彼女の提案は、舞踊という対象を特定の地域や民族とは異なる視点からとらえようという試みである。

ここまで、舞踊人類学に連なる系譜を検討してきたが、クラス以降前提とされてきた文化相対主義的舞踊観（各地域および各民族に固有の舞踊が存在し、それらに序列はない）は、現在のグローバル化した状況において、その変化の過程をとらえるために、より緻密な追跡が要求されるものへと変化してきたのである。

Ⅲ 舞踊民族誌／dance ethnography

1 舞踊研究における民族誌的転回

以上のように、舞踊人類学は自文化中心主義的舞踊観への批判やフィールドの設定の刷新など、人類学の中心における議論と関わりながらその姿を確立させてきた。そのなかで、近年、舞踊人類学のなかから舞踊民族誌 (dance ethnography) と呼ばれる舞踊研究上の潮流が生まれている。

舞踊民族誌とは、文字通り、舞踊を対象とした研究に民族誌的な手法をとり入れた舞踊研究を指す。この立場の最大の特徴は、「参加志向型の方法論 (participatory-oriented methodology) 」 [Dankworth 2014 : 96]¹³⁾ に基づき、調査者自身の経験を主要なデータとした再帰的实践を重視する点にある。そして、「知識は動きのなかに埋め込まれている」 [Sklar 1991 : 6] という前提に立ち、それらがある特定の文化の、特定の場面において作り出されると考える。対象となる社会の人々が、彼ら自身が関わる舞踊をどのように理解しているのか、さらには、フィールドにおける調査者自身の身体感覚がどのように変化したのかを素材にして思考を展開することが民族誌の特徴だとするならば、舞踊民族誌は特に後者を重視した立場にある。換言すると、社会的・文化的コンテクストに置かれた舞踊を「客観的に」理解するという視点ではなく、フィールドにおける調査者の身体に積極的な意味を与え、眼前で今まさに立ち上がる舞踊について「経験的に思索する」という視点が重視されていると言える。

これらの考えは、人類学においては新しいものではない。フィールドワークが調査者の「主観」を排した科学的な方法とはもはや考えられなくなって以降、調査者の「主観」をいかにデータとして扱うかという問題が、人類学のなかで議論されてきたからである [Collins and Gallinat (eds.) 2010 ; Geertz 1983 ; Marcus and Fischer 1986]。しかし、舞踊譜などの科学的手法を方法論の中心に据えてきた従来の舞踊研究において、調査者の「主観的」経験に積極的な意味付けを行おうとする民族誌的手法は、舞踊研究の可能性を拓くものとして歓迎されたのである。

舞踊人類学に軸足を置いてきた人類学者を中心に、舞踊民族誌は舞踊を対象とした他分野の研究者によって採用され始めている。なかでも Buckland (ed.) [1999, 2006] は、舞踊民族誌を体系的に取り上げた先駆的な研究のひとつである。その後には、ここに寄稿した著者達の弟子筋にあたる舞踊研究者達が続いている。たとえば、グローバル化におけるローカルな舞

踊の現場の変化を扱った Dankworth and David (eds.) [2014] や、観光や移民等の人の移動に伴う舞踊の変容の分析を通して、人類学的な「舞踊」・「文化」の両概念の再考に挑んだ Kringselbach and Skinner (eds.) [2014] がある。ほかにも、西欧における劇場ダンス (theater dance) の分析に民族誌的な手法を取り入れた Davida (ed.) [2011] がある。

2 実体験に基づく再帰的思考の重視

以上のような、舞踊研究における「民族誌的転回 (ethnographic turn) 」 [O'Shea 2010 : 5] のほかに、舞踊民族誌は人類学的方法論にとっても少なからぬ意義を持つ。それが、参加志向性に基づく再帰性と内部性である。

舞踊民族誌を研究の柱とする研究者は、自身が対象とする舞踊の実践者であることが多い。この意味するところは、彼／彼女らが、調査の間だけ舞踊に参加するのではなく、対象となるジャンルの舞踊において教師等の形態で振付等をする立場にあり、公式の競技会に出場し、その業界の行く末に対して何がしかの責任を負う立場にある人が多いということの意味する [e.g. Marion 2008 ; McMains 2006]。調査のために舞踊に参加するというよりも、舞踊を経験することが先にあり、調査や学術的思考はその経験の側面という考え方に近い。

このように、言わば「内部の視点」に立ち、調査者自身の経験に関する再帰的な思考を特徴とする研究が、舞踊研究の一分野として行われてきた。たとえば、サンバをはじめとしたブラジルの舞踊に注目し、動きに込められた「抵抗」の側面を分析した Browning [1995] や、日本舞踊における知識の伝達に焦点を当てた Hahn [2007] 等、自身の経験を考察の主たる素材に据えた研究がある。また、アメリカにおけるサルサを取り上げた ジョアンナ・ボッセは、多民族の出自の参加者によって構成されるフォーメーションチームにメンバーとして参加し、コーチの教え方による自身のとまどいや他の参加者の反応を考察の素材に据えている [Bosse 2008]。このように、舞踊への参加を前提とした研究を指して、イギリスで舞踊人類学の教育を受けた ジョナサン・スキナーは、「舞踊人類学ほど、書き手が踊り、その経験を他者と共有することが決定的である分野は他にはない」と指摘する [Skinner 2010 : 111]。

一方で、自己言及的な研究姿勢が陥りやすい、単なる「自己暴露」 [Williams 1994 : 7] および「告白的人类学」 [Cooley and Barz 2008 : 20 ; Grau 1999 : 164] の問題についても指摘されている [Davies 2007 ;

Koutsouba 1999]。

この点で、特に重要になるのが、フィールドで得たデータに関する留保条件の提示である。つまり、自身がフィールドで得たものが、具体的にどのような状況において得られたものか、どのようなバイアスのかかった状態で得られたものなのかを示すことによって、記述の説明能力の有効範囲を明示することが重視されているのである。ここで言う留保条件とは、菅原和孝の言う「理論負荷性」に相当する [菅原 2010 : 47, 248]。自身の観察がどのような理論や経験則、政治的關係から影響を受けているのかを明示し、さらには、それらを複数の研究者と参照し合うことによって、現実に対する相対的に正確な理解にたどり着くことが、学問的営為の核心であるということを菅原は強調する [菅原 2010 : 248]。

この点に関して、沖縄の伝統舞踊を対象とした台湾の趙綺芳は、調査者としてのアイデンティティ、ジェンダー、情報へのアクセス、フィールドにおける政治的關係の4点から、フィールドにおける自身の立場を克明に記述している [Chao 2001 : 79-95]。たとえば、趙が調査を行った沖縄の伝統舞踊は、調査当時の1990年代末において主に女性によって担われていたために、女性である趙は調査がしやすかったこと、さらには、当時、趙は4歳になる娘を伴っていたために、練習の合間に若い母親達が行う授乳の場にも参加することができたということなどが記されている [Chao 2001 : 85-86]。その際に趙は、調査者と被調査者の区分が曖昧化し、両者がともに知識の生産過程に参加する、といった今日につながるフィールドワークの姿を想定している [Chao 2001 : 79]¹⁴⁾。以上のような留保条件の提示を伴った第一人称での語り (first-hand narratives) [Buckland 2010 : 339] によって、超越的視点からの「客観的」説明ではなく、まぎれもなくその場にいた人間としての著者の語り が確保されるのである¹⁵⁾。

本章まで、舞踊人類学と舞踊民族誌について述べてきた。現在の舞踊研究のうち、人類学に連なる研究は次の2つに分かれている。1つ目は、前章で見たような、人類学の伝統と直接結びついた舞踊人類学であり、2つ目は、本章で見た、民族誌的手法を新たに取り入れた舞踊研究 (舞踊民族誌) である [O'Shea 2010 : 5]。

IV 日本における舞踊人類学

1 日本における舞踊人類学の先駆者

日本での舞踊人類学の展開において、重要な役割を果たした研究者に先述の遠藤保子がいる。II章でも述

べたように、遠藤には研究史上の成果があり、1980年代から演劇学者の宮尾慈良らとともに、英米圏の舞踊人類学の動向を日本国内に向けて紹介する活動を行ってきた経緯がある [遠藤 1985, 1989, 1999, 2000 ; 宮尾 2003]。

遠藤は、主にアフリカの伝統舞踊に関する計量舞踊学的研究 (Choreometrics) を行っている。計量舞踊学とは、ルドルフ・ラバンによって考案された舞踊譜 (Labanotation) を基礎にして1960年代後半に進められた舞踊研究の一潮流である。計量的な立場からの研究は、必ずしも舞踊人類学の主流ではないが、舞踊研究全体において今なお重要な位置付けにある。画期となった研究は、コロンビア大学人類学部のプロジェクトとして、民俗学者のアラン・ローマックスを中心に進められたものである [Lomax 1968]。方法論上の特徴は、身体の動きの範囲と形態の分析を行う際に舞踊を細かい単位に分割し、そこから抽出した各要素を他の地域や民族の舞踊との比較に用いるというものである¹⁶⁾。遠藤もこの流れのもと、主に舞踊学会¹⁷⁾を拠点にして、踊り手の身体にモーションキャプチャーを装着し、動作データの収集を行っている。それらのデータを解析し、CGによる再現表示などを通して、伝統舞踊の保存や技法の伝承に結びつける研究を行っている [遠藤 2011 ; 遠藤他 (編) 2014]。

ほかにも、舞踊に関してイギリスで舞踊人類学の教育を受けた大谷紀美子の名を挙げておきたい。大谷は、インドの古典舞踊であるバラタナティヤム (Bharatanatyam) を対象に、クイーンズ大学ベルファスト校で1994年に博士号を取得している。同校では伝統的に、舞踊は民族音楽学の一部として教えられており、舞踊を専門とした常勤の人類学者は不在であった。舞踊に関する人類学は、民族音楽学者ジョン・ブラッキングの主導のもと、社会人類学部において各方面の舞踊の専門家を臨時で講師に招くという形で教育が行われていた [Grau 1993 : 22-23]。大谷は、舞踊人類学を含めた国際的な舞踊研究の拠点である、国際伝統音楽会議 (International Council for Traditional Music: ICTM) の民族舞踊学研究会 (Study Group On Ethnochoreology) にも参加しており、日本を代表する舞踊人類学者の一人である [大谷 1984 ; Ohtani 1991, 1994]。しかし大谷は、帰国後は舞踊人類学という分野にこだわらず、舞踊研究という、より大きな枠組みのもとに自身の研究・実践活動を行うようになったため [大谷 1999]、人類学に関連付けられた英米の舞踊研究の体系が、大谷を通して日本国内にもたらされることは少なかった。

2 民族音楽学と舞踊人類学

日本において舞踊人類学に連なる分野があるとすれば、それは民族音楽学である。舞踊は音や音楽が導く現象として、世界的にも古くから民族音楽学の一部として扱われてきた経緯がある。その後、20世紀前半に音声と映像を記録する技術の進展状況が音楽研究と舞踊研究を互いに独立したものに変わっていくに伴い [Seeger 1994 : 690]、日本では主に、舞踊は前者を専門とする民族音楽学において扱われてきた¹⁸⁾。

民族音楽学における舞踊の扱いは、近年新たな局面を迎えている。それは、舞踊が音楽的行為の一環である事実に再び光を当てようという試みである。たとえば、人類学者の野澤豊一は、クリストファー・スモールらの研究に打ち出されている「行為としての音楽」という立場を表明している [Small 1998 (2011) ; Turino 2008 (2015)]。野澤は、かつてジョン・ブラックが「音や交感する身体の渾然一体となった現象」[野澤 2013 : 101] として「生社会ダンス (biosocial dance)」 [Blacking 1976 : 11] という概念を提唱していたことを受け、「音楽」と「その周辺の行動」を切り離す従来の立場では、現実の音楽的な場面を把握できない [野澤 2013 : 97] と主張する。野澤の立論は、これまでの民族音楽学が「音 (sound)」の研究に特化しすぎるあまり、「音」が生み出される場で生じる現象 (身体的動作を含み、この中に舞踊も含まれる) があまりにも多く捨棄されてきたという問題意識に支えられている¹⁹⁾。いわば、「音 (sound)」に矮小化されてきた「音楽」概念を拡大することで、舞踊という身体表現をその内部に取り込もうとする立場である²⁰⁾。野澤らの試みは、音の研究と身体の動きの研究が分離した現状に対する痛烈な批判である²¹⁾。

V 舞踊人類学の展望

現在、世界の舞踊研究において舞踊人類学をひとつの共通項とする組織に、先述の国際伝統音楽会議 (ICTM) と舞踊研究会議 (Congress On Research in Dance: CORD) がある。ICTMは21の研究部会から構成される巨大な組織であり、そのうちのひとつに民族舞踊学研究部会がある。2年毎の会議は、主にヨーロッパ諸国が持ち回りで開催し、参加者は、東欧や北欧、北米からの研究者が多い²²⁾。一方のCORDは、アメリカに拠点を置く組織であり、世界の舞踊研究において、ICTMの民族舞踊学研究部会と双璧を為す²³⁾。

舞踊人類学の代表的研究者であるイギリスのアンドレ・グラウによれば、現在、舞踊に関心のある学生は世界的に増加傾向にあるという²⁴⁾。しかし、舞踊人類学を体系的に教える大学は世界的に見て極めて少ない

状況であり²⁵⁾、したがって、舞踊人類学の成果や歴史を知る学生はそう多くない²⁶⁾。本稿の冒頭において、筆者は英米の舞踊人類学が日本ではあまり紹介されていないと述べたが、この状況は世界的なものである。近年、舞踊民族誌という名称を知る舞踊研究者は決して少なくないが、その土壌となった舞踊人類学について知る者は多くない。事実、ロンドン大学キングスカレッジで現在進められているプロジェクト「Modern Moves」²⁷⁾ は、民族誌的手法をひとつの柱とする世界的な舞踊研究のプロジェクトであるが、そこで舞踊人類学の歴史的経緯が共有されることは稀であるという²⁸⁾。

最後に、舞踊人類学の今後について2点の指摘をしておきたい。1点目は他分野との合流についてである。1950年代までは人類学と民俗学がともに舞踊研究を行っていた。たとえば、東欧や北欧の民俗学においては、フォークダンス運動を背景とした舞踊研究の伝統があり、民俗学者は伝承者としての地域の古老にアクセスし、舞踊の記録・保存を行っていた [e.g. Bakka 1999]。その後、人類学が高度に理論的になるにつれ、民俗学と袂を分かつようになる。しかし、民俗学には舞踊研究に関する成果が豊富に蓄積されており、舞踊を接点とした両者の協働の意義は決して小さくない²⁹⁾。

また、民族音楽学との関係も重要である。先述の野澤豊一らは、音楽と舞踊が本来は一体であったことに注目している。分析の力点を「音」へとシフトさせてきた民族音楽学が、音楽によって生起する舞踊を再び重視し始めているのと同様に、これまで「動き」のみを扱う傾向にあった舞踊人類学サイドにも、舞踊とともにある音楽をどのようにとらえるのかが問われている。以上のように、旧来の枠組みを固守する方向ではなく、かつて一体であった分野の再統合や、類似する領域間の協働を模索する方が生産的である。

2点目は、歴史個性性の再評価についてである。グローバル化の進展により、舞踊の越境が与件として扱われるようになった現在、舞踊の実践を、特定の土地や民族と結びつけて語ることはもはや「時代遅れ」になったという向きもある。しかし、舞踊の起源を特定の地域や民族に求められなくなったということは、舞踊がまとう歴史個性性が否定されたということ必ずしも意味しない。むしろ、ある特定の舞踊がその土壌から離床した時に各行き先で歴史個性がどのように変容するのかについての探求が、今後はよりいっそう求められてくるはずである [e.g. 古賀 2012]。舞踊人類学者のヘレナ・ウルフは、歴史個性性を欠いた単なる舞踊の記述ではなく、舞踊という現象を通して個別の文化的特性を見ることが、舞踊を人類学的に

研究するうえで重要であると述べている [Wulff 2007 : 2]。

本稿では、日本における舞踊人類学の元となった英米の舞踊人類学の系譜と、近年そこから生まれた舞踊民族誌について述べてきた。自らを舞踊人類学者 (dance anthropologist) と呼び、人類学における議論を参照しつつ、一方で、人類学の今後に影響を及ぼすような研究を志向してきた人々の足跡に目を向けることの意義は、今後の日本の人類学的舞踊研究にとって決して小さくないはずである。

謝辞

本稿は2016年度に北海道大学大学院文学研究科に提出した博士論文「日本の社交ダンスにおける上演作品化に関する舞踊人類学的研究」の第1章を改訂したものである。本稿の執筆にあたり、桑山敬巳先生 (北海道大学) からは、内容から構成に至るまで貴重なアドバイスを頂いた。また、2名の匿名の査読者の方々からは、本稿がより多くの読者に開かれたものになるために多数の建設的なコメントを頂いた。記して謝意を申し上げます。

注

- 1) 「dance」という概念をそのまま「舞踊」に置き換えることはできない (たとえば、日本語における「舞」、「踊り」、「舞踏」は微妙にニュアンスが異なる)。本稿では、英米のdance anthropologyが日本において、「舞踊人類学」と表記されてきたことになり [遠藤 1999 : 326]、「舞踊」、「舞」、「踊り」、「舞踏」、「dance」、「ダンス」の総称として「舞踊」を使用し、英米のdance anthropologyの潮流を「舞踊人類学」と表記する。
- 2) 同誌において「舞踊 (もしくはダンス、踊り)」をタイトルに入れた論文は、創刊以来、2015年の時点で7点である [安藤 2001 ; 田邊 1935 ; 築島 1944 ; 中原 1993 ; 野澤 2010 ; 福岡 1996 ; 吉田 2011]。
- 3) 日本語で「舞踊人類学」に言及した論稿には、ほかにも鈴木 [1996] やスナイダー [1999] があるが、舞踊人類学の沿革や動向について体系的に説明したわけではない。
- 4) 舞踊研究者の片岡康子は、基本的視角や方法論から舞踊に関する研究を9分野に細分化し、舞踊研究の体系化を試みた [片岡 1993]。片岡によれば、舞踊研究の体系は、①舞踊美学、②舞踊芸術学 (作品研究・舞踊家研究・舞台美術)、③舞踊史、④舞踊人類学、⑤舞踊社会学、⑥舞踊教育学、⑦舞踊記録

法・資料検索、⑧心理学、⑨バイオメカニクス (解剖・生理・栄養を含む) に分類でき、舞踊人類学はそのうちの一分野である。同じく舞踊研究者の安則貴香によれば、1950年代以降、現在まで日本における「舞踊」および「ダンス」に関する研究は全体的に増加傾向にあり、なかでも、舞踊人類学に関しては、年を追うごとに対象とする地域が多様になっているという [安則 2008 : 22]。

- 5) 舞踊人類学者のスーザン・リードは、ある集団、ある地域に固有のものとしてきた舞踊が時空を超えて作り変えられる状況を受けて、「舞踊に関する人類学を展開する機が熟した」 [Reed 1998 : 514] と表現している。
- 6) 「文明化の指標のひとつを言語の使用に定めるのであれば、非言語的行為の代表格である舞踊は文明化に伴って消滅していく」という考え方のことを指す [Williams 2004 : 65-66]。
- 7) エヴァンズ=プリチャードの学生であったドリッド・ウィリアムズは、後に舞踊人類学に関する教科書を出版し、後進の育成に資する著作を残している [Williams 1997, 2000, 2004]。同様に、舞踊人類学に関する網羅的な著作にMerriam [1974] やRoyce [1977, 2002] がある。
- 8) 同様の立場からの研究にGrau [1983] がある。
- 9) 一方で、このような「異文化離れ」を問題視する指摘もある [Buckland 1999]。
- 10) 同様の立場からの研究に、ナチス・ドイツ時代における国家と舞踊家との関係に注目したManning [1993, 1995] がある。
- 11) 身体接触を伴う舞踊が性的な要素を想起させることは、これまでの人類学においても指摘されてきた点である。たとえば、クラックホーン [1971 : 37-38] では、男女が身体を接触させて行う舞踊の例が挙げられ、それに対するアメリカ・インディアンの子どもの反応を通して男女間の身体接触の禁忌が指摘されている。
- 12) Davida [2011] では、西欧の人類学者にとっての「ホーム」であった西欧の劇場ダンス (theater dance) への関心が、近年、再び高まっていることが指摘されている [Davida 2011 : 9]。
- 13) 同様の表現に「participatory participant-observation」 [Chao 2001 : 79] がある。
- 14) 他にも、調査者がフィールドで「舞踊の専門家」として迎えられている時に特に顕著に現れる、ある種の互酬性に関する指摘もある [Gore 1999 ; Nahachewsky 1999]。
- 15) 「第一人称での語り」は決して新しいものではない

- い。本稿では、近年の舞踊研究における舞踊民族誌への注目の一因が今まさに身体を動かしている紛れもない著者自身の感覚を著作に反映できるようになった点にある、ということを指摘するに留めたい。
- 16) 同様の立場からの研究に、レイ・バードウィステルの動作学 (Kinesics) がある [Birdwhistell 1969]。
- 17) 1975年設立。体育学や運動工学、舞踊史学、教育学など、「舞踊」を共通項に多様な分野の研究者が集まっている。近年では、医療、福祉、スポーツ、災害など、社会的なトピックに目を配りながら、多様なテーマを扱うようになってきている。たとえば、2012年の第17回定例研究会では「震災と舞踊」の企画を行っている。
- 18) 民族音楽学のなかで舞踊研究に特化したものが「民族舞踊学 (ethnochoreology)」と呼ばれてきた [金光 2016 : 24]。
- 19) 野澤以前にも音楽的行為の一部としての舞踊に注目した研究は存在する。たとえば、野村雅一と鈴木道子の編著 [野村、鈴木 1990] では、音楽とともに生起する身ぶりとしての舞踊に注目し、各著者のフィールドにおける舞踊の実践が報告されている。そのほかにも、金光真理子によるイタリアの伝統舞踊における音楽と舞踊の関係を分析した研究もある [金光 2008]。また、近年では、舞踊研究の立場から音楽と舞踊を同時に扱う必要性を明確に打ち出した研究も登場している [Mohd and Stepputat (eds.) 2016]。
- 20) 野澤は、「民族音楽学」ではなく「音楽の人類学」という呼称を使用することで、この立場を表明している [野澤 2013 : 95-97]。
- 21) この点をめぐっては、たとえば、民族音楽学者の塚田健一のように、逆方向の「音楽分析離れ」に注意をうながす論者もいる [塚田 2014 : 337]。
- 22) 日本を含む東アジアからの参加者は極めて少ない。2016年の会議では、アジア圏からは、マレーシア3人、台湾1人、フィリピン1人の参加であり、日本からの参加者は筆者のみであった。
- 23) 規模は小さいが、アメリカにはCORDの他にもCCDR (Cross-Cultural Dance Resources) がある。
- 24) この点は、先述の安則 [2008] の指摘とも符合する。また、1980年代以降の韓国においても、各大学における舞踊学科新設に伴い、舞踊研究で博士号を取得する学生が増加している [崔 2008]。
- 25) 2015年度現在、グラウの所属するローハンプトン大学舞踊学科において「Anthropology of Dance」の講義が設置されている。
- 26) 2015年8月7日付私信。

- 27) 「運動のトランスナショナリズムとアフロ・ディアスポラのリズム文化」という副題のもと、アフリカに起源を持つあらゆるリズムの舞踊が世界にどのように広まっていったのかに注目した研究プロジェクト (期間 : 2013年~2018年)。なかでも、植民地支配という負の歴史と、そこから生まれた舞踊が世界の都市部で人気を博すようになった現実との連続性に主眼がある。http://www.modernmoves.org.uk/ (2016年12月30日閲覧)
- 28) 2015年8月7日付私信。
- 29) 両者の合流の必要性への注目は舞踊研究に限らない。2015年10月には、イギリス王立人類学協会 (Royal Anthropological Institute) において民俗学と人類学の関係を主題化したシンポジウムが開催されている。

参考文献

<日本語>

安藤 直子

- 2001 「観光人類学におけるホスト側の『オーセンティシティ』の多様性について——岩手県盛岡市の「チャグチャグ馬コ」と「さんさ踊り」を事例として」『民族学研究』66 (3) : 344-365。

遠藤 保子

- 1985 「ナイジェリアに関する舞踊人類学の動向」『舞踊学』8 : 52-53。
- 1989 「アフリカに関する舞踊人類学の研究動向」『舞踊学』12 : 44-46。
- 1999 「舞踊人類学研究の国際動向」『体育学研究』44 : 325-333。
- 2000 「海外舞踊文献紹介」『舞踊学』23 : 119-124。
- 2001 『舞踊と社会——アフリカの舞踊を事例として』文理閣。
- 2011 「今日のアフリカにおける舞踊の伝承と保存」『舞踊学の現在——芸術・民族・教育からのアプローチ』遠藤保子他 (編)、pp.147-161、文理閣。

遠藤 保子、相原 進、高橋 京子 (編)

- 2014 『無形文化財の伝承・記録・教育——アフリカの舞踊を事例として』文理閣。

大谷 紀美子

- 1984 「インド古典舞踊の伝承と学習」『口頭伝承の比較研究1』川田順造、徳丸吉彦 (編)、pp.195-223、弘文堂。
- 1999 「舞踊研究の現在」『東洋音楽研究』64 : 61-67。

片岡 康子

- 1993 「モダンダンスとバレエ研究の現状——80年代DRJを中心に」『舞踊学』15：19-22。
- 金光 真理子
2008 「サルデーニャ舞踊における音楽と舞踊の相関関係」『舞踊学』31：10-21。
2016 「音楽と舞踊」『民族音楽学 12の視点』徳丸吉彦（監修）、増野亜子（編）、pp.22-35、音楽之友社。
- クラックホーン、クライド
1971 『文化人類学の世界』外山滋比古、金丸由雄訳、講談社現代新書。
- 古賀 万由里
2012 「異文化を踊る——インド舞踊のグローバルゼーションと日本での受容」『哲学』128：369-402。
- 菅原 和孝
2010 『ことばと身体——「言語の手前」の人類学』講談社選書メチエ。
- 鈴木 道子
1996 「<舞踊人類学>からの視点」『「音」のフィールドワーク』藤井知昭（監修）、民博「音楽」共同研究（編）、pp.376-389、東京書籍。
- スナイダー、アレグラ・フラー
1999 「ダンス・イベントにおけるジェスチャーの諸レベル」『叢書身体と文化 第1巻 技術としての身体』野村雅一、市川雅（編）、澤田昌久、野村雅一訳、pp.306-351、大修館書店。
- 田邊 尚雄
1935 「マーシャル及カロリン群島に於ける音楽と舞踊」『民族学研究』1（2）：258-276。
- 崔 柄珠
2008 「韓国舞踊学論文の研究動向」『舞踊学』31：135-138。
- 塚田 健一
2014 『アフリカ音楽学の挑戦——伝統と変容の音楽民族誌』世界思想社。
- 築島 謙三
1944 「未開人と舞踊——律動の観点に立って」『民族学研究』10（2・3）：240-253。
- 中原 ゆかり
1993 「奄美八月踊りの伝統と創造——対抗による伝承から統合へ」『民族学研究』58（3）：258-271。
- 野澤 豊一
2010 「対面相互行為を通じたトランスダンスの出現——米国黒人ペンテコステ派教会の事例から」『文化人類学』75（3）：417-439。
- 野村 雅一、鈴木 道子（編）
1990 『民族音楽叢書 身ぶりと音楽』東京書籍。
- 福岡 まどか
1996 「仮面の解釈——ジャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に」『民族学研究』61（2）：191-214。
- 宮尾 慈良
2003 「舞踊人類学の研究方法論」『スポーツ人類学研究』5：1-18。
- 安則 貴香
2008 「舞踊研究の動向と課題——高等教育機関発行雑誌における舞踊関連論文の分析を中心として」『専修大学社会体育研究所報』56：17-29。
- 吉田 ゆか子
2011 「仮の面と仮の胴——バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンプラージュ」『文化人類学』76（1）：11-32。
- <英語>
- Bakka, Egil
1999 Or Shortly They would be Lost Forever: Document for Revival and Research. In *Dance in the Field: Theory, Method and Issues in Dance Ethnography*. Theresa J. Buckland (ed.), pp.71-81. Macmillan Press.
- Birdwhistell, R.L.
1969 *Kinesics and Context*. University of Pennsylvania Press.
- Blacking, John
1976 Dance, Conceptual Thought and Production in the Archaeological Record. In *Problems in Economic and Social Archaeology*. Gale de Giberne Sieveking, Ian H. Longworth and K.E. Wilson (eds.), pp.1-13. Duckworth.
- Bosse, Joanna
2008 Salsa Dance and the Transformation of Style: An Ethnographic Study of Movement and Meaning in a Cross-Cultural Context. *Dance Research Journal* 40（1）：45-64.
- Brinson, Peter
1985 Epilogue: Anthropology and the Study of Dance. In *Society and the Dance*. Paul Spencer (ed.), pp.206-214. Cambridge University Press.
- Browning, Barbara
1995 *Samba: Resistance in Motion*. Indiana University Press.
- Buckland, Theresa J.

- 1999 All Dances are Ethnic, but Some are More Ethnic than Others: Some Observations on Dance Studies and Anthropology. *Dance Research Journal* 17 (1) : 3-21.
- 2010 Shifting Perspectives on Dance Ethnography. In *The Routledge Dance Studies Reader*, second edition. Alexandra Carter and Janet O'Shea (eds.), pp.335-343. Routledge.
- Buckland, Theresa J. (ed.)
 1999 *Dance in the Field: Theory, Method and Issues in Dance Ethnography*. Macmillan Press.
 2006 *Dancing from Past to Present: Nation, Culture, Identities*. University of Wisconsin Press.
- Carter, Alexandra and Janet O'Shea (eds.)
 2010 *The Routledge Dance Studies Reader*, second edition. Routledge.
- Chao, Chi-Fang
 2001 Dancing and Ritualisation: An Ethnographic Study of the Social Performances in Southern Okinawa, Japan. PhD thesis. Department of Dance Studies School of Performing Arts University of Surrey.
- Clarke, Mary and Quentin Crisp
 1982 *The History of Dance*. Crown Publishers.
- Collins, Peter and Anselma Gallinat (eds.)
 2010 *The Ethnographic Self as Resource*. Berghahn Books.
- Cooley, Timothy J. and Gregory F. Barz
 2008 Casting Shadows: Fieldwork is Dead! Long Live Fieldwork!: Introduction. In *Shadows in the Field: New Perspectives for Fieldwork in Ethnomusicology*. Gregory Barz and Timothy J. Cooley (eds.), pp.3-24. Oxford University Press.
- Daniel, Yvonne
 1991 Changing Values in Cuban Rumba: A Lower Class Black Dance Appropriated by the Cuban Revolution. *Dance Research Journal* 23 (2) : 1-10.
 2005 *Dancing Wisdom: Embodied Knowledge in Haitian Vodou, Cuban Yoruba, and Bahian Candomble*. University of Illinois Press.
- Dankworth, Linda E.
 2014 Embodying Cultural Identities and Creating Social Pathways through *Mallorquin* Dance. In *Dance Ethnography and Global Perspectives: Identity, Embodiment and Culture*. Linda E. Dankworth and Ann R. David (eds.), pp.95-115. Palgrave Macmillan.
- Dankworth, Linda E. and Ann R. David (eds.)
 2014 *Dance Ethnography and Global Perspectives: Identity, Embodiment and Culture*. Palgrave macmillan.
- Davida, Dena
 2011 Anthropology at Home in the Art Worlds of Dance. In *Fields in Motion: Ethnography in the Worlds of Dance*. Dena Davida (ed.), pp.1-16. Wilfrid Laurier University Press.
- Davida, Dena (ed.)
 2011 *Fields in Motion : Ethnography in the Worlds of Dance*. Wilfrid Laurier University Press.
- Davies, Charlotte Aull
 2007 *Reflexive Ethnography: A Guide to Researching Selves and Others*, second edition. Routledge.
- Evans-Pritchard, E.E.
 1928 The Dance. *Africa* 1 : 446-462.
- Geertz, Clifford
 1983 *Local Knowledge*. Basic Books.
- Gore, Georgiana
 1999 Textual Fields: Representation in Dance Ethnography. In *Dance in the Field: Theory, Method and Issues in Dance Ethnography*. Theresa J. Buckland (ed.), pp.208-220. Macmillan Press.
- Grau, Andrée
 1983 Sing a Dance. Dance a Song: The Relationship between Two Types of Formalized Movements and Music among the Tiwi of Melville and Bathurst Islands, North Australia. *Dance Research Journal* 1 (2) : 32-44.
 1993 John Blacking and the Development of Dance Anthropology in the United Kingdom. *Dance Research Journal* 25 (2) : 21-31.
 1999 Fieldwork, Politics and Power. In *Dance in the Field: Theory, Method and Issues in Dance Ethnography*. Theresa J. Buckland (ed.), pp.163-174. Macmillan Press.
- Hahn, Tomie
 2007 *Sensational Knowledge: Embodying Culture through Japanese Dance*. Wesleyan University Press.
- Hanna, Judith L.
 2006 *Dancing for Health: Conquering and Preventing Stress*. Altamira Press.

- Hazzard-Gordon K.
1990 *Jookin': The Rise of Social Dance Formations among African Americans*. Temple University Press.
- Jackson, Naomi M. (ed.)
2004 *Right to Dance: Dancing for Rights*. Banff Centre Press.
- Jackson, Naomi M. and Toni Shapiro-Phim (eds.)
2008 *Dance, Human Rights, and Social Justice: Dignity in Motion*. Scarecrow Press.
- Kaeppler, Adrienne L.
1978 Dancing In Anthropological Perspective. *Annual Review of Anthropology* 7 : 31-49.
2000 Dance Ethnology and the Anthropology of Dance. *Dance Research Journal* 32 (1) : 116-125.
- Kealiinohomoku, Joann
1983 An Anthropologist Looks at Ballet as a Form of Ethnic Dance. In *What is Dance? : Readings in Theory and Criticism*. Roger Copeland and Marshall Cohen (eds.), pp.533-549. Oxford University Press.
- Koutsouba, Maria
1999 'Outsider' in an 'Inside' World, or Dance Ethnography at Home. In *Dance in the Field: Theory, Methods and Issues in Dance Ethnography*. Theresa J. Buckland (ed.), pp.186-195. Macmillan Press.
- Kurath, Gertrude P.
1960 Panorama of Dance Ethnology. *Current Anthropology* 1 (3) : 233-254.
- Lange, Roderyk
1980 The Development of Anthropological Dance Research. *Dance Studies* 4 : 1-36.
- Lomax, Alan
1968 *Folk Song Style and Culture*. American Association for the Advancement of Science.
- Malnig, Julie
2009 Introduction. In *Ballroom, Boogie, Shimmy Sham, Shake: A Social and Popular Dance Reader*. Julie Malnig (ed.), pp.1-15. University of Illinois Press.
- Malnig, Julie (ed.)
2009 *Ballroom, Boogie, Shimmy Sham, Shake: A Social and Popular Dance Reader*. University of Illinois Press.
- Manning, Susan
1993 *Ecstasy and the Demon: Feminism and Nationalism in the Dances of Mary Wigman*. University of California.
1995 Modern Dance in the Third Reich: Six Positions and a Coda. In *Choreographing History*. Susan L. Foster (ed.), pp.165-176. Indiana University Press.
- Marcus, George and Michael M. J. Fischer
1986 *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Movement in Human Sciences*. The University of Chicago Press.
- Marion, Jonathan S.
2008 *Ballroom: Culture and Costume in Competitive Dance*. Berg.
- Mcmains, Juliet
2006 *Glamour Addiction: Inside the American Ballroom Dance Industry*. Wesleyan University Press.
- Mead, Margaret
1928 (1976) *Coming of Age in Samoa: A Psychological Study of Primitive Youth for Western Civilization*. Morrow. (『サモアの思春期』畑中幸子、山本真鳥訳、蒼樹書房)
- Merriam, Alan P.
1974 Anthropology and the Dance. In *New Dimension in Dance Research: Anthropology and Dance - The American Indian*. Tamara Comstock (ed.), pp.9-28. Committee on Research in Dance.
- Mohd Anis Md Nor and Kendra Stepputat (eds.)
2016 *Sounding the Dance, Moving the Music: Choreomusicological Perspectives on Maritime Southeast Asian Performing Arts*. Routledge.
- Nahachewsky, Andriy
1999 Searching for Branches, Searching for Roots: Fieldwork in My Grandfather's Village. In *Dance in the Field: Theory, Method and Issues in Dance Ethnography*. Theresa J. Buckland (ed.), pp.175-185. Macmillan Press.
- Kringelbach, H el ene Neveu and Jonathan Skinner (eds.)
2014 *Dancing Cultures: Globalization, Tourism and Identity in the Anthropology of Dance*. Berghahn.
- Ohtani, Kimiko
1991 Japanese Approaches to the Study of Dance. *Yearbook for Traditional Music* 23 : 23-32.
1994 Rukmini Devi and Bharata Natyam: The

- Revival of Classical Dance in India. PhD. thesis. Queen's University of Belfast.
- O'Shea, Janet
2010 Roots/routes of Dance Studies. In *The Routledge Dance Studies Reader*, second edition. Alexandra Carter and Janet O'Shea (eds.), pp.1-17. Routledge.
- Prickett, Stacey
2013 *Embodied Politics : Dance, Protest and Identities*. Dance Books.
- Quigley, Colin
1997 Dance. In *The Dictionary of Anthropology*. Thomas Barfield (ed.), pp.106-107. Blackwell.
- Radcliffe-Brown, Alfred R.
1922 *The Andaman Islanders*. Cambridge University Press.
- Ramsey, Kate
1997 Vodou, Nationalism and Performance: The Staging of Folklore in Mid-Twentieth Century Haiti. In *Meaning in Motion: New Cultural Studies of Dance*. Jane C. Desmond (ed.), pp.345-378. Duke University Press.
- Reed, Susan A.
1998 The Politics and Poetics of Dance. *Annual Review of Anthropology* 27 : 503-532.
- Royce, Anya P.
1977 *The Anthropology of Dance*. Indiana University Press.
2002 *The Anthropology of Dance*, new edition. Huddersfield.
- Sachs, Curt
1963 (1972) *World History of the Dance*. Norton. (『世界舞踊史』小倉重夫訳、音楽之友社)
- Savigliano, Marta E.
1995 *Tango and the Political Economy of Passion (Institutional Structures of Feeling)*. Westview Press.
- Seeger, Anthony
1994 Music and Dance. In *Companion Encyclopedia of Anthropology*. Tim Ingold (ed.), pp.686-705. Routledge.
- Skinner, Jonathan
2010 Leading Questions and Body Memories: A Case of Phenomenology and Physical Ethnography in the Dance Interview. In *The Ethnographic Self as Resource*. Peter Collins and Anselma Gallinat (eds.), pp.111-128. Berghahn Books.
- Sklar, Deidre
1991 On Dance Ethnography. *Dance Research Journal* 23 (1) : 6-10.
- Small, Christopher
1998 (2011) *Musicking: The Meanings of Performing and Listening*. Wesleyan University Press. (『ミュージッキング——音楽は<行為>である』野澤豊一、西島千尋訳、水声社)
- Spencer, Paul
1985 Introduction: Interpretations of the Dance in Anthropology. In *Society and the Dance*. Paul Spencer (ed.), pp.1-46. Cambridge University Press.
- Steinman, Louise
1995 *The Knowing Body, the Artist as Storyteller in Contemporary Performance*, second edition. North Atlantic Books.
- Turino, Thomas
2008 (2015) *Music as Social Life*. The University of Chicago Press. (『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ』野澤豊一、西島千尋訳、水声社)
- Wagner, Ann Louise
1997 *Adversaries of Dance : From the Puritans to the Present*. University of Illinois Press.
- Williams, Drid
1994 Self-reflexivity: A Critical Overview. *Journal for the Anthropological Study of Human Movement* 8 (1) : 1-10.
1997 *Anthropology and Human Movement: The Study of Dances*. The Scarecrow Press.
2000 *Anthropology and Human Movement: Searching for Origins*. The Scarecrow Press.
2004 *Anthropology and the Dance: Ten Lectures*. University of Illinois Press.
- Wulff, Helena
1998 *Ballet Across Borders: Career and Culture in the World of Dancers*. Berg.
2007 *Dancing at the Crossroads: Memory and Mobility in Ireland*. Berghahn Books.
- <WEB>
野澤 豊一
2013 「音楽と身体の人類的研究に向けて」http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/other/doc/10_2_2_nozawa.pdf (2017年1月4日閲覧)
- Tylor, Edward B.
1881 *Anthropology: An Introduction to the Study of*

Dance Anthropology and Dance Ethnography

Atsuki Inoue

[dance anthropology, dance ethnography, dance study, ethnographic turn, participatory-oriented methodology]

This article aims to show what dance anthropology is and how it has appeared. Through that, it aims to open a space in which many anthropologists involved in the anthropological study of dance in Japan can share important related literature with each other.

The subject of dance has long been very familiar to anthropology. The phenomena of dance can be seen all over the world, with the category of dance anthropology first appearing in Western academia in the 1960's. Dance anthropology is a branch of the anthropological studies of dance that positions dance in a sociocultural context. It originated as a separate category with the American dance ethnologist, Gertrude Kurath.

Among various kinds of dance research taking place out of anthropological interest, dance anthropologists have tackled such questions as 'what is dance?', 'what are people doing when they dance?', and 'how can we capture the process of dance happening right now?'

Dance anthropology can be described as a field of dance research based on all the discussions and debates occurring since the time of Kurath, combining a culturally relativistic view of dance with a process-centered approach.

Dance anthropologists currently conduct research on dance around the world using the Study Group on Ethnochoreology of the International Council for Traditional Music (ICTM) as well as the Congress on Research in Dance (CORD) as their bases.

A noteworthy feature since the 1990's has been the successive publication of several treatises on dance using ethnographic methodology. They are often described as "dance ethnography journals."

According to Theresa Buckland, a leading dance scholar, dance has gradually emerged from several disciplines: anthropology, sociology, folklore studies, performance studies and cultural studies. With the utilization of ethnographic methodology by dance scholars trained in each of those disciplines, key concepts of participatory-oriented methodology, such as 'reflexivity' and 'embodied knowledge,' have become more commonly used in dance studies than previously.

For instance, Yasuko Endo, a leading Japanese dance scholar, has introduced Western dance anthropology to Japanese dance research. Since the 1980's, she has worked with Jiryo Miyao, a theater scholar, to introduce those themes.

Meanwhile, the efforts by ethnomusicologists to examine dance within music studies must also not be forgotten. In recent years, they have tended to focus on dance as an integral aspect of music more than they used to.

Although few anthropologists in Japan know about the academic category of dance anthropology, it will become increasingly important for them to follow discussions in dance anthropology and participate actively in them.